はじめに

本講義はある程度現代文を勉強した人が私大最難関である早稲田大学合格レベルに達するための講座です。ですから、問題も講義内容も最高峰のものを用意しました。予習の段階で全くわからない問題があったとしても気にせずに講義で理解してください。すると、当初は難しいと思えた問題にも太刀打ちできるようになるでしょう。

五日間でみなさんの頭脳に革命を起こしてみせます。

本講義の現代文の考え方

本講義は文章を従来の「意味論」だけでなく「統語論」の側面からも解説していきます。もちろん文章には「意味」があります。しかし、「意味」というのは読者の側に生成される主観的なものでもあります。ですから、「意味」ばかりを追求していくと、「読者によって意味が異なる」ということが起こり得るのです。

一方、大学入試の問題はたとえ最高峰の記述問題であろうとも、「読者によって解答が異なる」ということはありません。そこには客観的に正しい答えがあって、その答えや答えに至るプロセスがいかなるものかによって点数がつけられます。であれば、言語の客観性である「統語論」的側面を無視することはできません。言語の「統語論」的側面とは以下の三つです。

① **文法**
② **構文**
③ **論理**

たとえば、①文法ですが、筆者によって副助詞の「も」の使い方が異なるということはあり得ません。また、読者によって副助詞の「も」の機能が異なって受け取られるということもあり得ません。副助詞の「も」は、たとえどんな筆者であろうと、どんな読者であろうと、客観的に機能します。

また、②構文ですが、本講義では「主語―述語」の関係や、「修飾語―被修飾語」の関係や、「接続語―被接続語」の関係からなる文構造のことを構文と呼びます。この構文に関しても、文法と同様のことが言えます。読者によって「文の主語―述語が異なる」ということはありません。構文もまた、どんな筆者であろうと、どんな読者であろうと、客観的に機能します。

最後に、③論理ですが、ここが本講義の最大の特徴です。①文法や②構文は「日本語」という言葉のルールです。それに対し、③論理は「日本語」だけにとどまりません。あらゆる言語に及ぶ最も普遍的なルールといってよいでしょう。数式が世界共通の言葉であるように、論理もまた世界共通の普遍的ルールなのです。本講義では論理を以下の「４つの言葉のルール」と「４つの言葉の使い方」とします。

- **「でない」という否定**
- **「かつ」という連言**
- **「または」という選言**
- **「ならば」という条件法**

以上の４つの言葉のルールを駆使して筆者は文を書きます。ですから、読者も４つの言葉のルールを理解して読まなければなりません。本講義ではその「ルール」と「方法」を伝えます。

さあ、最先端の現代文講義の開講です。

受講の際の注意点　効果的な講義の利用法

最高の講義を用意しましたが、ただ映像を見るだけでは力はつきません。効果的に学習するためにも、この利用法を実践してください。

Ⅰ　予習について

まず一度本文を通読し、「要旨把握」と「意味段落分け」をしてください。そして次に、「設問」や「傍線部」を確認してから、「解答の根拠」を本文中に求めてください。最後に、本文中の解答の根拠をもとにして「記述解答」を書いてください。

夏期講習では「制限時間なし」でよいのですべての問題に解答して下さい。その際、「解答の根拠とした文」に線を引いておいてください。できれば、「その部分を解答の根拠とした理由」をメモ欄に書いておいてください。

この作業を予習の段階でしておくことで、講義に集中できる仕組みになっています。

予習ポイント　問題を解く。解答の根拠をメモしておく。

Ⅱ　講義について

映像授業を受講している間は、メモを取らないでください。

ただ見たことをノートに写す、あるいは聞いたことをその場でメモに書くというのは、「頭の中には何も残っていない」状態になりやすいのです。ですから、「復習タイム」に講義のポイントを思い出しながらメモを取ってください。あくまでも「一度頭の中に置いた」上で、「頭の中から取り出す」という作業を怠らないでください。この作業が「文章を読み、解答を書く」という現代文の解答プロセスのトレーニングになるのです。

講義ポイント　**講義中はメモを取らない。説明や図は講義後ノートに書く。**

Ⅲ　復習について

よく「現代文は復習しなくてもよい」という意見を聞きます。しかし、そもそも「復習しなくてよい」なら、復習して覚えるべきポイントがない「授業」も受ける必要がないでしょう。受験生の貴重な時間をいただくわけですから、本講義は「復習ポイント」も用意してあります。

「復習ポイント」をしっかり覚えてください。これは現代文を分析する上で必要になる考え方です。

復習ポイント	ポイントを踏まえ類題を解く。解答を書き直す。

早大　現代文　目次

第一講　「逆説」の読解①　……　p.8
第二講　「否定」「条件法」「連言」「選言」の発展的読解　……　p.26
第三講　「逆説」の読解②　……　p.42
第四講　「差異」と「類似」の発展的読解　……　p.54
第五講　「論理的読解」総復習　……　p.70
巻末資料　読解法一覧　……　p.82

第一講　「逆説」の読解①

次の文章を読んで、あとの問いに答えよ。

この文章では、人間と人間以外の存在者の関係を私たちはいかに捉えうるのかという問いを、人間以外の存在者＝非人間の範例である「動物」と「機械」に焦点をあてながら探求する。人間に近しい動物たるチンパンジーや鯨、人間に近しい機械たるロボットや人工知能（ＡＩ）は、いずれも学問的探求と社会的関心の大きな焦点となってきた。これらの非人間と人間の関係性をそもそも私たちはいかなるものとして考えることができるのか。

動物、人間、機械の位置づけは混[a]メイを極めている。その証拠に、私たちはこの三項において等号と不等号の相互に矛盾する組み合わせを想定できる。例えば、近年「技術的特異点（Technological Singularity）」という概念と共に普及した「あらゆる知的能力において人間を凌駕する知能機械がいずれ現れる」という未来予測は、知的活動における機械と人間の同質性を前提とするが、知性の頂点をめぐって機械と人間がせめぎあう近未来の見取り図に動物が参与することはない（　A　）。一方、近代的思考の端緒となった機械論哲学においては、[1]外部から与えられた規則に従っ

てふるまうという点で動物と機械の同質性が措定され、理性的な人間精神がそれらの外部に位置づけられる（［B］）と同時に、人間の身体と動物のあいだに同質性が措定される（人間＝動物）。対して、エドゥアルド・ヴィヴェイロス・デ・カストロが論じる南米の「パースペクティヴィズム」など、多くの非近代社会に見られる発想において人間と動物は「自己」や「魂」をもつ点で同質とされる一方で、道具や機械にそれらの特性が認められることは稀である（［C］）。全ての関係を一挙に表せば「機械＝人間≠動物＝機械≠人間＝動物≠機械」となり、三者から取り出される全ての二者関係に等号と不等号が適用されることになる。

　動物・人間・機械という三項の比較は、[2]比較を行う主体としての私たち人間が比較される客体でもあるという再帰性において特徴づけられる。どんなに客観的に三者の比較を行っているように見えても、そこには私たち＝人間における動物や機械との具体的な関係性が影響を及ぼしており、比較される対象同士の相互作用の変化に伴って比較のありかた自体が変容してしまう。私たちにとって、動物・人間・機械の関係性は常に［D］であると同時に［E］である。外側から三者を眺めることが可能であるように見なされる一方で、私たちは常に自ら比較の対象でもあるものとして残りの二者と相互に作用しあっている。以下では、動物・人間・機械と

いう三項の関係を、［D］／［E］な観点の併存に注目しながら考察していく。

　まずは、動物・人間・機械をめぐる近代的思考の端緒となったデカルトの機械論哲学（動物＝機械説）について検討しよう。教科書的な説明において「デカルトは、動物や人間の身体を時計などの機械と類比的なものと見なすことで、諸存在は固有の目的や形相を実現する本性をもつとするアリストテレス自然学を否定し、機械と同じく客観的な法則に従うものとして自然現象を把握し解明する近代自然科学の基盤を築いた」とされる。こうした一般的な説明において、デカルトの議論は、機械と生物という比較対象の外部から人間（デカルト）が行った客観的な比較として提示される。一方、動物を含む諸存在の運動の原理をそれらがもつ霊魂や欲望によって説明するアリストテレス自然学は、自然界の現象を擬人化したものであり、[3]分析されるもの（自然）に分析するもの（人間）が誤って投影された、客観的でない主張として提示される。

　これに対して、デカルトの動物＝機械説もまた、ある種の擬人化の産物として捉えられることを示したのがジョルジュ・カンギレムである。彼はまず、有機体と機械の間に類比性を見いだすデカルトの議論が、柱時計や懐中時計、水車、人工噴水、パイプオルガンといった十七世紀当時の先端

技術に依拠していることに注目する。これらの機械は、 F といった人間の運動と密接に結び付いた旧来の技術に比べて、それらが円滑に作動しているときには人間の関与なしに自動的に動いているように見え、その限りにおいて自律的に動きまわる動物や人間身体と類比的な存在として現れる。だが同時に、これらの機械はその動力を―― F ほど明示的ではないが――人間の働きに頼っており、特定の目的のために人間によって作られるものに他ならない。機械は、表面的には単体で作動するが、背後では、動力や目的や形態を機械に与える人間と常に結びついているという二重性をもつ。

　動物＝機械説は、機械の二重性を自然の事物に重ねあわせることで構成される。では、自然の事物において「機械を制作し動力や目的を与える人間」に対応するものは何か。一六六二年に出版された『人間論』の冒頭でデカルトは次のように述べている。「身体とは、できうるかぎりわれわれに類似したものにするために神がまったく意図的に形づくった土でできた像または機械以外の何ものでもない、と私は想定する」。この記述に基づいて、カンギレムは、動物＝機械説は次の二つの条件が満たされて初めて意味をなす主張であると言う。それは第一に、動物＝機械（「身体」）を制作するものとして神が存在することであり、第二に、機械の制作に先立っ

て生体がイデアとして与えられていることである。動物＝機械は、動力因としての神と形相因かつ目的因としての模倣すべき生体が先在して初めて生じる。

　このように、動物＝機械説とは、神による自然の制作を人間による機械の制作に擬えて把握するという概念操作の産物であり、アリストテレス自然学とは異なる擬人化の形式をなす。そこでは、[4]アリストテレスの目的論的な生命理解が放棄されているのではなく、目的論の位置がずらされているのだ。個々の生物の内部に設定されていた諸要因は神がそれを模倣して身体を作る生体のイデアおよび動力因としての神へと転置され、自然のうちにある合目的性が除去されることで、動物や人間身体をはじめとする自然物はそれに固有の目的や霊魂を奪い取られ客観的な規則に従う存在＝機械として把握される。こうした[5]理論上の「生命の機械化」を通じて、自然物や動物の技術的な利用が正当化される。カンギレムは、この発想が西欧人の典型的な姿勢の前提をなすと指摘した上で、それを次のように定式化する。

> 人間は、いかなる自然的な合目的性をも否定する場合にのみ、また、一見して霊魂を有するように見える自然を含めて、自己自身の外にある自然全体を手段とみなすことができる場合にのみ、自分を自然の主

人にして所有者とすることができるのである。

デカルトの動物＝機械説は、その一般的な理解に反して、対象（動物・機械・人間）を外部から分析者（人間）が客観的に分析するような外在的な比較とは言い切れない。機械に関してはその製作者として、生物に関してはその一部として、人間（比較するもの）は比較される対象に内在している。だが同時に、デカルトの議論はこうした比較の内在性を捨象することで成立している。まず、機械に特定の目的や形態や動力を与える製作者たる人間の存在が捨象されることで、客観的な規則に従って自律的に動作する機械の姿が得られる。そうした機械と類比的な存在として生物一般を捉えることで、目的因・形相因・動力因が生物の内部から[b]シュウ奪され、製作者としての神へと移動する。そして、信仰と理性を通じた神との関係を通じて、人間の半身（「人間精神」）が生物の属する自然界から抜け出し、「自然の主人にして所有者」としての地位を獲得する。

端的に言って機械論哲学は、生命を機械と比較し、その余剰（「動物＝機械」ではないもの）として近代的な「人間」を浮かび上がらせる仕掛けである。人間の圏域（「文化」や「社会」）を自然の圏域から峻別することを可能にした点で、デカルトの行った概念操作はラトゥールの言う近代的な「純化」の端緒をなすものであるとも言えよう。自然の圏域から切り離

され「純化」されることで、人間は自然を客観的に分析しうる地位を得る。したがって、前述した教科書的な説明において自明視される「動物・人間・機械を外在的に比較する人間」とは、実際にはデカルトの議論の帰結として現れるものであり、議論の帰結を前提に置き換えることでデカルトが行った比較の内在性は[6]不可視化されてきたのである。

　周知の通り、動物＝機械説における概念操作は二元論的な人間の分節化を導く。諸要因を欠いた動物＝機械の一種としての身体（延長）と、それらを手段として利用できる理性的な意志と判断能力を備えた精神（思惟）という区分が、人間的領域に導入される。クロード・レヴィ＝ストロースが論じたように、人類学の古典的な分析対象であるトーテム信仰が、環境に生息する種々の存在者たちとの関わりを媒介として自然種間の示差的格差と人間集団間の示差的格差のあいだに相同性を仮設することによって自然の体系に頼りながら人間社会の体系を確立しようとする営為であるならば、機械論哲学とは、環境に配備された様々な機械との関わりを媒介として自然のうちにある分節（自然種／神）と人間のうちにある分節（延長／思惟）の間に相同性を仮設することによって自然の体系を解析し利用し所有しうる人間的主体を構成する試みであると言えるだろう。非近代社会における「動物のトーテミズム」に対して、[7]機械論哲学は近代社会におけ

る「機械のトーテミズム」を確立する基盤となったのである。

両者のいずれにおいても、相同性は発見されるのではなく仮設される。トーテミズムにおいて社会集団間の差異はあらかじめ存在するのではなく、自然種同士の差異に擬えられることで生み出される。ダン・スペルベルが論じたように、「集団は社会的差異を表現しようとするのではなく、むしろ、それらを創出し、強化しようとするのだ」。「身体（延長）／精神（思惟）」という区分についても、より厄介なのは、両者がいかに結びつくのかという有名な問いよりも、そもそも私たち人間のあり方においてどこまでが身体的でどこからが精神的と言えるのかという問いである。動物＝機械説は、「自然種／神」の差異に基づいて人間における身体／精神という所与の差異を表現したものではなく、むしろ当の差異を創出し、強化することによって、後者の問いから人々の注意を逸らし、前者の問いを前景化させてきたのである。

（久保明教の文章による）

（注）トーテミズム……社会が種々の集団に分かれていて、ある集団が特定の種の動植物あるいは他の事物と特殊な関係があるとする信仰。

イデア……個々の事物をそのものたらしめている根拠である真の実在。

問一　傍線部ａ・ｂにあたる漢字を含むものをそれぞれ次の中から一つ選び、解答欄に記入せよ。
傍線部ａ　イ　共メイ　ロ　低メイ　ハ　メイ誉　ニ　感メイ　ホ　メイ運
傍線部ｂ　イ　シュウ慣　ロ　シュウ労　ハ　税シュウ　ニ　シュウ教　ホ　シュウ復

問二　空欄 A ・ B ・ C にそれぞれあてはまる記述として最も適切なものを次の中から一つ選び、解答欄に記入せよ。
イ　動物＝機械＝人間　ロ　動物＝機械≠人間　ハ　人間＝動物≠機械
ニ　機械＝人間≠動物　ホ　人間≠機械≠動物

問三　傍線部１「外部から与えられた規則に従ってふるまうという点で動物と機械の同質性が措定され」とあるが、それはどういうことか。その説明として最も適切なものを次の中から一つ選び、解答欄に記入せよ。
イ　機械とは本来、人間が動物とは異なるということの証として作られたものであり、神という外部から見た時に同じ範疇に入るということ。
ロ　人間は外部からの影響を受けやすい存在であり、本能的な動物としての側面と有機的な機械としての側面がともに作動するということ。
ハ　外部からの規則とは重力のようなものであり、地球上に存在する限り、動物も機械もその影響から脱することは不可能であるということ。
ニ　動物は人間の指示に関わりなく、本性や本能によって自由自在に動きまわり、機械もまた人間の関与がなくても自動的に動くということ。
ホ　機械も動物も、客観的な法則に基づいて作動する存在であり、固有の霊魂や欲望を持って自律的に作動する存在ではないということ。

問四　傍線部２「比較を行う主体としての私たち人間が比較される客体でもあるという再帰性において特徴づけられる」とあるが、それはどういうことか。その説明として最も適切なものを次の中から一つ選び、解答欄に記入せよ。

イ　動物・人間・機械の位置付けに関して比較検討する人間そのものが、比較の対象になっているので、その分析を行う人間の考え方が否応なく結果に反映されたものになるということ。

ロ　動物・人間・機械の位置付けに関して比較検討する人間そのものが、元来、動物から進化し、機械を創出した存在なので、前提として一定の優位を占めることができるということ。

ハ　動物・人間・機械の位置付けに関して比較検討する人間そのものが、あらゆる知的活動の拠点となるので、機械や動物について考える時にはまず、人間の思考に戻るということ。

ニ　動物・人間・機械の位置付けに関して比較検討する人間そのものが、神を想像の中で創り出したので、神を動物や機械の造物主と捉える思考を問い直すことから始めるべきだということ。

ホ　動物・人間・機械の位置付けに関して比較検討する人間そのものが、理性を失えば動物や機械へと変容する可能性を秘めているという前提を理解した上で、議論を進めるべきだということ。

問五　空欄［D］・［E］に入る語句の組み合わせとして最も適切なものを次の中から一つ選び、解答欄に記入せよ。

イ　相同的／対比的

ロ　根源的／遡及的

ハ　外在的／内在的

ニ　近代的／古典的

ホ　有機的／無機的

問六　傍線部３「分析されるもの（自然）に分析するもの（人間）が誤って投影された、客観的でない主張」とあるが、それはどういうことか。その説明として最も適切なものを次の中から一つ選び、解答欄に記入せよ。

イ　人間から見た自然というのは、人間本位の一方的な価値観に基づくものであり、自然から発信されている多様なメッセージに対応しきれてはいないということ。

ロ　自然と人間との関係は、人間の側から分析を試みることしかできないという限界を内包しており、両者を比較検討する視座を設定することが重要であるということ。

ハ　人間は思考の根底に対象を擬人化して捉えるという習性を備えており、そうして人の特性や活動になぞらえられた自然は、本来の機能を過小評価されるということ。

ニ　自然界の現象にはそれぞれ自律した意図や目的があるという考え方は、それに向き合う人間が自らの感情や思考をそれらにあてはめているにすぎないということ。

ホ　人間は本来、自然の一部であるという謙虚な姿勢を欠いた分析は、自然を捉える際に人間が自然界に及ぼしている影響を見落とすという問題を内包しているということ。

問七　空欄［Ｆ］（二箇所）に入る語句として最も適切なものを次の中から一つ選び、解答欄に記入せよ。

イ　帽子や手袋
ロ　馬車や牛車
ハ　稲作や焼畑
ニ　斧や梃子
ホ　望遠鏡や虫眼鏡

問八　傍線部４「アリストテレスの目的論的な生命理解」とあるが、それはどういうことか。その説明として最も適切なものを次の中から一つ選び、解答欄に記入せよ。

イ　人間は動物の一部ではあるが、自らの意志をもって生きているのであり、自然界における相互作用から超越しているということ。

ロ　自然界に生息するものにはそれぞれ霊魂があって、固有の目的の実現を目指すのであり、人間の支配下にはないということ。

ハ　自然界の生物を、人間が創り出した機械と混同するのは意味がないことであり、その本来の生態に負荷をかけるべきでないということ。

ニ　デカルトは生物に生存の目的意識はないとしたが、アリストテレスは人間のみが生きる意味を問い直すとしたこと。

ホ　自然界の現象は、人間の認識によって擬人化され、あたかも人間がそうした現象に影響力を及ぼし得るかのように捉えること。

問九　傍線部５「理論上の「生命の機械化」」とあるが、それはどういうことか。その説明として最も適切なものを次の中から一つ選び、解答欄に記入せよ。
イ　動物や人間身体は固有の目的や霊魂を有する存在ではないので、それらは所有され、分析・利用されてもよいという捉え方。
ロ　神による自然の制作という概念を導入することにより、自然の中の存在同士が連携しあって機械のように作動するという捉え方。
ハ　生命そのものを一つのイデアと想定する思考が、その集合体として神の存在を機械的に実証する可能性を持つという捉え方。
ニ　自然界での生命の循環には、それを認識する人間が不可欠であり、神の視点から見る時に人間の存在こそが自然を機械化するという捉え方。
ホ　神を目的因として想定するアリストテレスの思想においては、人間の精神もそれによって動かされている機械と変わらないという捉え方。

問十　傍線部６「不可視化されてきた」とあるが、何が不可視化されたのか。最も適切なものを次の中から一つ選び、解答欄に記入せよ。
イ　文化や社会を創り出してきた人間自体が、自然界に溶け込むことによって純化されたということ。
ロ　機械に生命を吹き込むのは人間のみに与えられた役割であり、人間は自然界から超越した存在であるということ。
ハ　現実の世界は、現象としての生命と物質としての機械とのせめぎ合いによって成立しているということ。
ニ　自然のうちにある合目的性を尊重することによって、人間が自然の主人にして所有者となるということ。
ホ　自然物と機械とを比較する主体である人間自体が、比較対象である自然界の一存在であるということ。

問十一　傍線部7「機械論哲学は近代社会における「機械のトーテミズム」を確立する基盤となったのである」とあるが、それはどういうことか。その説明として最も適切なものを次の中から一つ選び、解答欄に記入せよ。

イ　自然や生物を扱う際に、それらが自律的に活動する事実を認め、そのメカニズムに客観的な法則性を見出す機械論哲学は、近代社会においてかつては信仰の対象であった自然や生物の固有の目的と霊魂を疑問視する科学的な思考を備えているということ。

ロ　自然や生物を扱う際に、それらが有機的に組織化された全体を重視し、分節化することが不可能であると捉える機械論哲学は、近代社会において人間が大規模に推進した自然破壊が、機械化による弊害の最たるものであるという信念を持つに至ったということ。

ハ　自然や生物を扱う際に、それらを計量可能な現象と見なし、人間による自然界の制御の方法を探究する機械論哲学は、近代社会において機械こそが自然や生物を理想化した存在であり、人間もまた理想化された自然の一部であるという確信を得たということ。

ニ　自然や生物を扱う際に、それらの有限性や相同性を説明するためにはすべてを数値化しなければならないとする機械論哲学は、近代社会において機械と人間のあいだに捉えどころのない特定の関係があるという考え方の起点になったということ。

ホ　自然や生物を扱う際に、それらを二元論的に分節し、また人間を身体と精神とに二元論的に分節することで自然界と人間の相同性を仮設した機械論哲学は、近代社会において有機体と機械を類比的に捉えることによって自然の利用を正当化するということ。

問十二　この文章の内容に合致するものを次の中から二つ選び、解答欄に記入せよ。

イ　人間的領域を身体と精神に区分することによって、手段的に利用可能な部分が創出され、近代的思考が発展する契機となった。

ロ　自然界には人知の及ばない領域があり、近代以前の社会では、その解明の過程で「神」という存在が創出された。

ハ　トーテム信仰のある世界では、人間の能力の延長として機械が作られることは、「神」を模した行為として戒められていた。

ニ　人間精神の基盤は自然界で形成されるものであり、そのため人間は自然を支配するのではなく、共生を試みる義務がある。

ホ　筆者の考えるデカルトの機械論哲学は、アリストテレス自然学とは対照的に、自然界を客観的に分析する存在として人間を位置づける。

へ　人間は、自身に関してもどこまでが身体でどこからが精神かといった根源的な問いに明快な解答を出せているわけではない。

ト　アリストテレス自然学で述べられている「動物・人間・機械」についての考察は、近代における科学技術の進歩に貢献した。

（次ページより解答欄）

問一
a
b

問二
A
B
C

問三

問四

問五

問六

問七

問八

問九

問十

問十一

問十二

模範解答

第一講「逆説」の読解①　解答

問一
a ロ
b ハ

問二
A ニ
B ロ
C ハ

問三 ホ

問四 イ

問五 ハ

問六 ニ

問七　ニ

問八　ロ

問九　イ

問十　ホ

問十一　ホ

問十二　イ・ヘ